

記憶のオベリスク

吉岡 潤

(津田塾大学学芸学部准教授)

ヨーロッパにおいて、いや世界中を見ても、ポーランドほど国境線が変動し、時代とともに「国のかたち」を大きく変えてきた国は見当たらない。そのポーランドの歴史に魅せられて早や20年余、その間私は、国境線を目にし跨ぐことに興奮を覚えるという妙な体質を身につけてしまった。

そんな私を釘づけにした一枚の絵がある。ある本の挿絵として載っていた第一次世界大戦前の絵葉書には、画面左上と右上から流れてくる川が中央やや右で1つに合流し右下へと流れていく、そんな風景が描かれていた。それぞれの川に隔てられた3つの部分を三角で結ぶように、中央上、左下、右下に小さな肖像画も見える。「三皇帝の三角」とのキャプションが付されたこの絵葉書は、1815年のウィーン会議で定まったロシア、プロイセン、オーストリア3帝国の国境線が合わさるところ、つまり史上名高いポーランド分割の集約点を描いたものだったのだ。3つの肖像画はそれぞれロシアのニコライ2世、ドイツのヴィルヘルム2世、オーストリア＝ハンガリーのフランツ・ヨーゼフ1世である。この絵を見て、現在の地図には引かれていない、歴史に埋もれた国境線をこの目で確かめたいと思わない国境マニアなど果たして存在するだろうか。

私は早速地図を広げ、絵葉書に描かれた場所の特定を試みた。絵の中に書かれたソスノヴィエツという都市名や川の名から、ここであろうと思われる地点はわかったものの、いわゆる名所旧跡であることを示すマークをつけている地図など一つもなかった。かつての名所も、今や何でもない場所となっているようだ。一体、どんなところなのか――。

2006年夏、それを確かめるチャンスがめぐってきた。私は1年間の海外研修でワルシャワに滞在していたのだが、その私をゼミの学生たちが訪問し、ついでにアウシュヴィッツに行ってくるという。アウシュヴィッツとソスノヴィエツとの距離は30kmほど、私は喜々としてガイドを申し出た。アウシュヴィッツへは最寄りの都市クラクフから通常はバスや列車で向かうところ、あえてレンタカーで学生たちを連れ出した。アウシュヴィッツ見学もそこそこに、私たちはソスノヴィエツに向かった。ところが下調べした地点の近くにまでは行けるのだが、最終目的地がピンポイントにどこなのか、なかなかわからない。一度は川べりに肉薄したものの、背丈ほどの雑草に阻まれ近づくことができない。熱病にうかされたように土手を走る私への、学生たちの視線が冷たい。ようやくたどり着いたのは、絵葉書の通りに2つの川が合わさる合流点を一望できる、もう廃線になったと思われる鉄橋の線路上だった。「君たちはポーランド分割国境をその目で見た最初にして唯一の日本人大学生だ！(たぶん)」と長時間にわたる捜索に付き合ってくれた労をねぎらいつつ、「三皇帝の三角」に見入った。

目の前には2つの川がかたどるYの字が広がっている。Yの字の左辺が旧ドイツ帝国領、正面の中州が旧ロシア帝国領、右辺が旧オーストリア＝ハンガリー帝国領だ。どの川辺も人を寄せつけぬほど雑草や木が生い茂り、絵葉書で描かれたのとは異なり、そこはただの自然の一部となっていた。確かに、ポーランド分割は国民史の語りにおいては負の歴史であり、碑を建てたり記念するべき場所ではないのだろう、と納得しつつ、ポーランド人さえ訪れることがなさそうなその場所を立ち去ったのだった。ところが――。

2009年夏、3年前の「発見」に調子に乗った私は、再び、日本人東欧史研究者を2人ほどポーランド分割点へと案内した。ところが、そこは同じ場所とは思えないほど変貌を遂げていた。ロシア帝国の最果てだった Y の字の中州部分がきれいに整地され、公園のようになっていたのだ。さらに記念碑まで建っているではないか。近づいて碑を見てみると、そこにはこう刻まれていた。

「ヨーロッパのかつての分断とその統合についての記憶のオベリスク」

碑銘の下にはソスノヴィェツ市の紋章とポーランド旅行観光協会のロゴマーク、2007年という年号もある。決死の思いでたどり着いた前回のアタックの翌年の出来事だったようだ(学生たちの労苦は何だったのか)。ポーランドのEU加盟から3年、地元の地域振興策の一環として補助金でも下りたに違いない。名所旧跡を再発見(創造?)としてのツーリズム、地域振興、そのヨーロッパ的文脈での意味づけ——EU時代を迎えたポーランドの変化を象徴するような記念碑と言えよう。

それにしても奇妙な碑銘である。ポーランド分割が、ヨーロッパの分断・統合といかなる関連性を持つのだろうか?ヨーロッパであるはずのポーランドがヨーロッパではないロシアによって分割されたことはすなわちヨーロッパの分断であり、ポーランドがソ連(ロシア)による支配を脱し、さらにEUに加盟したことはポーランドのヨーロッパへの回帰、すなわちヨーロッパの統合回復だとも言いたいのだろうか。

EUが国境線というものの意味を決定的に変えたことは間違いない。一方で、国境の垣根をなくそうとしているEU域内とEU外とを分かつ境界線が、対照的に依然として高い垣根であることもよく指摘される場所である。そうした意味では、ポーランドというEU最果ての国に建つこの「記憶のオベリスク」は、建立者の意図とは離れたところで「ヨーロッパの分断と統合」を語っているのかもしれない。

ちなみに今日、Googleマップで「記憶のオベリスク」が建っている場所を近接拡大すると、「三皇帝の三角」という表示が(ポーランド語で)現れるようになっている。